

ライン工房  
情報誌

第34号

# 街の風

企画・制作  
社会福祉法人 ライン工房

〒861-8041  
熊本市戸島5丁目8番6号  
TEL 096-380-5752  
FAX 096-380-1343  
E-mail rine2001@alpha.ocn.ne.jp  
URL <http://www17.ocn.ne.jp/~line/>

## 新年のご挨拶

～そして「あたりまえ」ということについて～



社会福祉法人ライン工房 統括施設長 熊川嘉一郎

やや時機を失している感もありますが、改めまして、あけましておめでとうございます。

ライン工房も今や60名を超える方たちの活動場所となり、毎日わいわいとにぎやかに、時に(?)真剣に、利用者の皆さんも取り組まれています。様々な支援の手を受けながら彼らの居場所、活動場所がここにあるということ、それはもちろん大切にしたいことであり、今後とも私たち職員は彼らの活動を力強くサポートしていく役割をしっかりと果たしていきたいと思っております。

ただ、支援の担い手である私たち職員側が陥ってはならないと常々感じているのは、私たちがライン工房という空間に、悪い意味で“馴染んでいく”ということです。この“馴染む”というのはしっかりとその環境に溶け込んでいくという意味では好ましい面もありますが、そのような良い面ばかりではないようにも思うのです。例えば、初めてライン工房の職員となったときに感じた違和感や戸惑いも、時間を経るとともに解消されていき、いつしかその環境に馴染んでいくものです。そうやって馴染みきった後は、その空間や環境の中で起こっていることの総てが「あたりまえ」の日常風景、「あたりまえ」の出来事となってしまふということがあります。でも、それが果たしてほんとうに「あたりまえ」のことなのか、一歩引いて考えてみる必要があると思っております。

例えば、社会就労センターライン工房というのは申すまでもなくいわゆる「障害者施設」なのですが、障害を持つ方々が1ヶ所に大勢集まって活動する、ということは果たして「あたりまえ」なのか、ということがあります。

障害者施設に障害者がいること、それ自体はもちろん「あたりまえ」です。障害者施設なのですから。だけれど、なぜ彼は、彼女は“ここ”にいるのだろうか(いなければならぬのだろうか)、ということを考えてとき、それは果たして「あたりまえ」と言い切れるものなのか。彼らは障害の重さや様々な経緯から今、障害者施設を利用されるに至っていますが、彼らがもし障害というものを持っていなければ、施設ではない場所で、つまりはもう一方の「あたりまえ」の社会の中で暮らし、活動していく筈であった人たちでもあります。少なくとも施設を利用するために生まれてきた人は一人もいません。では、今すぐ施設を解体して彼ら全員を社会に送り出せるかということ、もちろんそれは叶いませんし、彼ら自身の今の望みとも異なるでしょう。しかしながら、彼らが施設を利用していること、そのこと自体を「あたりまえだ」と捉えていくことに私たち支援側が馴染んでしまふてはならないと思っております。

ほんとうの「あたりまえ」の生き方を、より体現していただくために、少なくとも彼ら一人ひとりには「利用者」「障害者」である前にこの社会に“生”を受けた一人の人間である、という単純なことを踏み外すことなく、そして“彼らが本来いた筈の場所”を失念することなく、あたりまえの自由さ、伸びやかさ、そして地域社会との重なりを大切にしながら、私たち職員一同、この一年も彼らの“生”をしっかり支えていきたいと思っております。

今年もどうぞ私たちの取り組みを叱咤し、そして皆さまのお力を賜りたく、よろしく願い申し上げます。